

「**トゥルファの家**」 Costa da Morte, Galicia, Spain

設計=アントン・ガルシア=アブリル

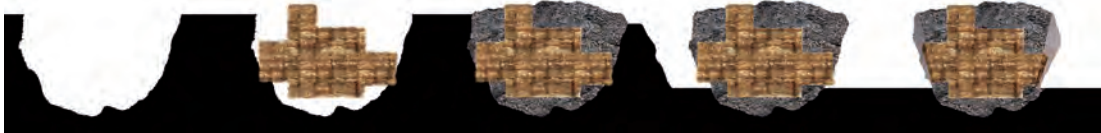
参照 | 本誌 pp.18-23, 『CASABELLA』792号[2010]

スペインのモルテ海岸にアントン・ガルシア=アブリルが設計した小さな隠れ家は、一瞥しただけで見る者の心に驚愕と興味を生じさせる。次の瞬間には、建築家がかくも究極的な建物を設計するに至った最終的な意図は何なのかと、(……)疑問を問わずにはいられなくなる。

コート・ダジュールにル・コルビュジエが建てたかの有名な「**カッパ・マルタンの休暇小屋**」^{カバノン}は、地中海の隠れ家の代名詞的存在である。このカバノンは、スペインの建築家にとって探求の出発点である。今回はその平面図を再現しているが、ただし、まったく違う「容器」を使った。事実、空間の輪郭を作っているのは控え目な板張りの壁ではない。内部空間の寸法は、言うなれば中に収められたヴォリュームによって決定されており、これと対照的に外



平面計画:左端のカバノン(ル・コルビュジエ)より右端の最終平面へのプロセスを示す



建設プロセス

側は無定形の土塊に覆われている。

建設プロセスを要約すると、工程のダイアグラムに示したように、まず地盤の掘削から始める。掘ったところに、長方形に整えた干し草俵を詰め込む。この干し草の形状がいずれ内部空間のヴォリュームとなるのだ。その後、俵

の上から大量のコンクリートを流し入れて空隙を埋め、最後に、掘り出した土で蓋をする。(……)さらに、[その]第一段階で作った物体から余分な土を取り除き、数ヶ所に切り込みを入れた後で、お腹を空かせた仔牛に詰め物の干し草をきれいに平らげさせる(……)。



全景



開口部に向かって見る

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2022 Arnoldo Mondadori Editore
©2022 Architects Studio Japan



全景：背後に市街を望む

柱を見れば分かるように、床スラブあるいは適確な位置に配されたコンクリートの支柱の上に思い思いに載っている。天井高の異なる一連の空間には、コンクリートの柱に形鋼をボルトで固定してできた樹木状の構造があちこちに立ち、その上に直線と曲線から成る屋根が載る。壁にしたことで屋根の強度を上げ、性能を高めている。遠くから眺めると、[内装デザインを担った]マウによれば、緑の大地に降り立った熱帯の鳥類の羽衣のような姿を表す。展

示室はリゾーム状の迷宮をかたちづくり、驚くようなところに設けられた開口部から光で照らされる。博物館全体は外部に向かって開かれている。わずか2ヶ所だけ、一方は立方体で他方は円柱形の閉じたヴォリュームが突き出ているが、建物の外被は総じて、公園の木々の間に浮かんだ色の点々だけで作られているように感じられる。

フランチェスコ・ダルコ
「フランク・ゲーリー式『生物多様性』」より抜粋



海岸より見る

作品：生物多様性博物館
設計：ゲーリー・パートナーズ——フランク・O・ゲーリー（デザイン・パートナー）；
T. Bell, L. Tighe（設計責任者）, B. Childers（プロジェクト・アーキテクト）,
A. Devarajan（プロジェクト・デザイナー）；E. Barco, D. Briscoe,
V. Chalikian, T. Chee, D. Disney, S. Gehry, J. Gonzalez, K. Harris,
J. Leman, C. Mercier, G. Metzger, N. Nacionales,
S. Natvig, M. O'Boyle, M. Sohst, A. Solano（設計チーム）
内装・展示構成：ブルース・マウ・デザイン——ブルース・マウ；
K. Sugden（デザイン・リーダー）；E. Leyland（責任者）；
K. McKinley（責任者）；R. Strass（インタラクティブ・ライター）
実施設計：Ensitu S.A.；Patrick Dillon（設計責任者）；
B. Goti, Z. Pozo, C. Gomez（建築家）；O. Ramirez（構造エンジニア）；
J. Kiamco（機械・電気エンジニア）
構造：Magnusson Klemencic Associates, Inc.；
J. Magnusson, J. Taylor, D. Beaman, X. Ma, N. Luck, R. Taylor
設備：Don C. Gilmore and Associates；M. Gilmore, R. Magno,
K. Kaiser, R. Grant, B. Madani
コンサルタント：Rosenberg Associates；Les Rosenberg；
Lightswitch Architectural（照明）；Ceramí and Associates（音響）；
T.A. Maranda Consultants, Inc.（水槽）
ランドスケープ：Edwina von Gal | 建築主：Fundación Amador
規模：敷地面積（生物多様性公園）2.4ヘクタール／延床面積 4,100m²
スケジュール：設計開始 2000年／着工 2006年8月／
公式開館 2014年10月2日 | 所在地：Calle de Amador, Panama



公園より見る



エントランス・キャノピー

「SaLoハウス」 Punta San Lorenzo, Veraguas, Panama

設計=パトリック・ディロン

参照 | 本誌 pp.48-53, 『CASABELLA』845号[2015]

ディロン自身が語るところによると、パリで活動していた時期に、彼はモンマルトル通りでの暮らしは自分に合わないと感じたという。そして彼が発見したのが、アリマデロの海岸である。トラック、カヌー、筏、あるいは驢馬の背に積んで、ディロンは自邸を建てる材料をサン・ロレンソ岬まで運んだ。テント地の屋根に溜まった雨水はプールにも使われる。テントはボルトで固定した細い鋼管で支えられている。一方、家の中心部はコンクリートで設えられたが、ほかの材料はすべて、上述の通り運搬が容易でないため、できるだけ軽いものが使われた。例えば、外被はファイバーグラス製のパー

テーションで構成され、屋外と屋内を分ける仕切りはない。外被より外側にバスルーム、キッチン、子供のための森の家がある。太陽光パネルと蓄電池が唯一のエネルギー源である。この家(面積345m²)の建設には地元の職人たちが協力したが、家具調度はディロンと妻の手で造られた。

SaLoハウスはひとつのエコ・システムを創出するため、また、建設の方法と材料を実験して熱帯地域の建築に何が適しているかを知る一種の実験室を誕生させるために構想された。これは完成形のない研究だと、建築家本人は主張する。(……)ディロン曰く、「簡素さ、そして空間や時間のような限界のないものを重んじる私たちの能力は、予想以上に急速に成長した」。

ジャン=マリー・マルタン

「パリのモンマルトル通りからパナマのサン・ロレンソ岬へ」より抜粋



平面図

作品: SaLoハウス | 設計・構造・設備・建築主: パトリック・ディロン

施工: パトリック・ディロン; ペラグアス南部地方 /

アリマデロ、マドレ・ビエハ、ソナの地元民

規模: 延床面積(屋外・屋内) 345m²

所在地: Punta San Lorenzo, Veraguas, Panama



リビング・エリア



全景



プール

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2022 Arnoldo Mondadori Editore
©2022 Architects Studio Japan

「セント村のアトリエ」 Sent, Scuol, Switzerland

設計=ノット・ヴィタル

参照 | 本誌 pp.60-65、『CASABELLA』872号[2017]

グラウビュンデン州の低エンガディー地方にあるセント村は、山の中腹にある海拔1,400mあまりの段丘だ。風景の素晴らしさと、肌を刺す冷たい空気とロマンシュ語民謡の調べの中で穏やかに流れる生活が、創造と芸術への愛を促すと説明される。

ノット・ヴィタル[コンセプチュアル・アーティスト、1948-]が建築家の兄ドゥリと自分のために出生地セントに建てた絵画アトリエは、彼が世界各地を放浪するのを止めて郷里に戻ろうと決めた時に居を定めた家の、すぐ近くの敷地に建っている。

アトリエの外観は、氷河とともに運ばれる歴史、遺産、物証のような、漂移する塊に思える。本作の場合、巨大な岩石は不規則に造形された表面によって自然を表現する一方で、まるで隅石のような合理的行為に還元できる輪郭をもつことから、人間の表現でもある。

その建築的特性は、周囲に並ぶヴァナキュラー建築と何の共通点も持たない。窓がなく、勾配屋根がなく、見慣れた大きさではなく、エンガディー地方の建築的伝統に結びつく素材を使っていない。だが、事実として、使われた素材は始源や祖先に関わるものを表現する。掘削した土地やトンネルを補強するため土木工事現場で一般的に使われる吹付けコンクリートが、ルーツ——原理となるアイデア——と結びついた光景を再現するために解釈し直されている。そこで強調され再演されるのは、現代



全景

特有の建設技術のもつ表現力なのだ。

アトリエの中に入った途端、外界に属するものすべてが消滅する。ノット・ヴィタルが昔から愛してやまないラエティア・アルプスの山、力強いピス・エイジャスの眺めもここにはない。油彩画、テンペルチン[松の含油樹脂]、石膏の粉、書物、カンバスなどの匂いが天才とともに内部に閉じ込められている。二元性と反対物の同居だ。動物と人間、直観と思慮、自然な人工と人工的な自然が、溶け合う

ほどに共存している。

ジョヴァンナ・クレスピ「自然な人工へのオマージュ」より抜粋

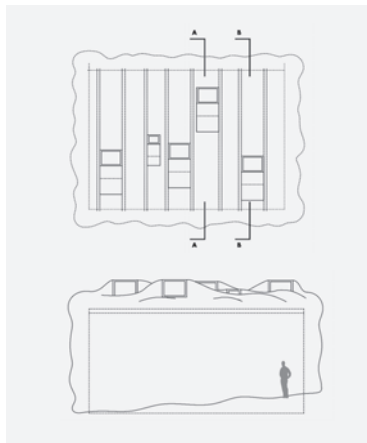
作品:セント村のアトリエ | 設計:ノット・ヴィタル

設計協力:Duri Vital | 木工:Plagger Pfunds A

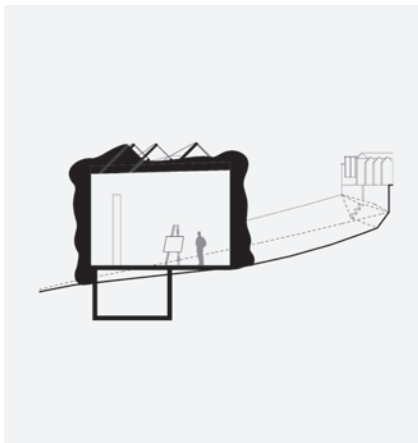
吹付けコンクリート:HTB landeck A

スケジュール:設計 2015年/施工 2016年

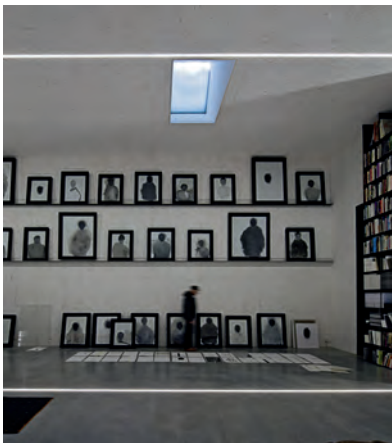
所在地:Sent, Scuol, Graubünden, Switzerland



屋根伏図/立面図



断面図



アトリエ内部



夜景

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2022 Arnoldo Mondadori Editore
©2022 Architects Studio Japan

「カサ・プリスマ」 Parque Nacional Conguillío, Chile

設計=スミルハン・ラディック

参照 | 本誌 pp.94-103, 『CASABELLA』910号[2020]

「コンギジオ」国立公園はアンデス山脈の中央部に位置する60km²を超える地域で、チリ南部のテムコ市から150km離れている。ジャイマとシエラネバダの火山群のほか、湖が点在する広大な森林地帯が含まれる。季節ごとに時間と空間が変化するこの自然風景において、ラディックは木製のプラットフォームを造り、同じく木製のパイルと点状のコンクリート基礎を使って地表から持ち上げた。こうすることで、床面の下では斜面がそのまま下降し、また近くのジャイマ山の最後の噴火を記録する、古い玄武岩質の溶岩石の跡を見ることがもできる。プラットフォームの上には、2つのオブジェが集められ、静物画のように並置された。(……)これらのオブジェはじつのところ引用である。つまり以下に述べる2つの住宅の引用であることを考えると、その本質は異所性と言えよう。建物の一部、小さいほうのヴォリュームは、篠原一男が1974年に山中湖村にプリズム・ハウス[「直角3角柱」]を建てた時に生み出した、正方形



メイン棟



メイン棟：背面ファサード

の解体を巡る感嘆すべき実践の「復元」に他ならない。
ラディックは、コンギジオ公園に建つかサ・プリスマの主寝室があるヴォリュームに、プリズム・ハウスの縦断面を再提示した。ただし長さは7.20mに縮め、完全に正方形の立面を作った。こうして篠原のもともとのアイデアに接近したのだ。木製のプラットフォームの、主寝室ヴォリューム

の反対側から立ち上がる2つめのヴォリュームでは、彼自身をモデルに採用した。と言うのも、チロエ島での赤い大テント[「アビタシオン」、2007]を支えた、亜鉛メッキ鋼材によるメッシュ構造を複製したからだ。
(……)彼は自作と日本人建築家の作品の2つの「再読」を混ぜ合わせる、じつに興味深い作業を成し遂げ、



コンギジオ国立公園



主寝室棟



左より主寝室棟、右にメイン棟を上空より見る